

仙台スタジアムごみ減量大作戦プロジェクト レポート～04 シーズンを終えて～

エコスタジアムに向けて



仙台スタジアムを訪れるサポーターが、ベガルタエコバッグの中にオリジナルタンブラーを入れて出かけ、売店にタンブラーを持っていき 100 円引きでビールを買う。ゲーム終了後はしっかりごみを分別して帰っていく。こんな光景が当たり前のように見られるようになったのはうれしい限りです。

サポーター、ボランティア、チームの意識が変わった！

今ではチームボランティアさん自ら紙コップの分別回収やごみ袋数のカウントを行い、ごみ袋の配置を考えるなど独自に工夫しています。サポーターの皆さんにも積極的にごみ分別する姿勢が見られるようになりました。チームも独自に「ベガルタ仙台エコプロジェクト」を立ち上げ、オリジナルエコバッグを発売するなど環境問題に取り組んでいます。

タンブラー使用率を調査！

紙コップ減量のために発売されたオリジナルタンブラーの使用率を調査しました。(10 試合のべ 25 店舗調査)

ビールの売上げ数に対する 1 試合平均使用率
…37.1% ('04 バージョンタンブラーが未発売だった 2 試合をのぞくと 40.0%！)

めざせ、

仙台スタジアムエコサポーター大作戦！

夏休み中の 8 月 25 日にはチームの協力により、子どもたちを対象とした学習会を企画しました。27 名の子どもたちがごみ分別の様子を見学、リサイクルについて学び、ゲーム観戦後にはスタンドのごみ拾いも体験しました。

ごみ袋数が安定！

観客 1,000 人あたりのごみ袋数

04 シーズン全試合平均…20.92 袋
('03 シーズン最もごみ袋数が少なかった試合が 19.7 袋、ほぼこのレベルで安定。)

'05 シーズンの活動は未定ですが、プロジェクトの名称を変更しサッカー以外のスポーツにも活動範囲を広げていく予定です。

MELONのあみめ⑥

執筆者：庄子都さん(緑・食部会メンバー)
「国際コメ年記念フォーラム
『米こそ命』レポート」

2004 年は国連が定めた「国際コメ年」でした。世界の半数以上の人々の主食である米の果たす役割について再確認する意味合いを込めて「米こそ命」をテーマに開催しました。

まず木村修一理事長が米の特徴を説明されました。「稲の生育には 32 の暑さと豊富な水が必要で、日本は適地であり、土地当たりの収量が多い。米に大豆を加えた日本型食事は栄養的にもバランスが良い。米は最も日本人に合った食物なのである」

話題提供に入ると、冬木勝仁氏(MELON 理事)が「そもそも米は自給的性格が強く、貿易率は小麦粉の 3 分の 1 (6%) 程度なのだが、WTO 農業協定下、本来は自給できる日本や韓国が、米輸入国となってしまった。国民の米消費量はここ 40 年で半減し、供給熱量の割合では、畜産プラス油脂が米を抜いてしまった。米を主食と位置づけることさえあいまいになっている」と話し、佐々木武彦氏(元古川農業試験場長)は、「フィリピンで 3 年間稲作の

「国際コメ年」…用語解説 8 面技術協力をしてきたが、地形が複雑で効率が悪く、反収は日本の明治時代の水準だった。日本の稲作の状況は全く対照的で、米の消費量は減少し、後継者不足で田んぼの荒廃が進んでいる。東北 6 県の中で宮城の米の評価が最下位なのは、田植え期が早過ぎるからではないか」と話されました。

パネルディスカッションでは、及川昭子氏(生産者)が「手間ひまかけていいものを作ろうと努力しているから、価格だけで判断せず、消費者がもっと理解してほしい」と発言し、菅原玲子氏(消費者)からは「日本型食生活を維持していくためにも、表示を見て国産を選ぶとか、産地を確かめて購入したい」と発言がありました。

全体のまとめとしてコーディネーターの河相一成氏(MELON 理事)が「消費者の食行動と生産者の行動がうまく合っていない。どうつきあわせていくか 農業だけの問題でなく、日本全体での仕組みを考えていくために学習が大切 国の公的バックアップをベースに、協同組合間で大きな仕組みを作っていくことが望まれる」と結びました。